

子族・午後五時の熱狂(加東康一)』『中央公論』86・3/参画意識が育てた此岸のタレントと、評判の自律化——「タヤケニヤンニヤン」とおニヤン子クラブ(平林千春)、『宣伝会議』86・5/他 (M・O)

△S D I△

ここ二年ほどマスコミ報道のなかで、「S D I(戦略的防衛構想)」という言葉が飛び交っている。「S D I」とは「Strategic Defense Initiative」の略称で、83年3月23日の「今世紀末までに西側の宇宙技術の粋を集めた防衛システムを作り、ソ連の軍事力を抑制する」というレーガン大統領の声明によって表面化し、その後84年頃から言葉として定着して世界の注目を集めている。

第二次大戦後、大きく世界を二分した米ソは度重なる軍縮協定・平和条約を結びつつ、対立の激化に伴ってより高度な軍事力を研究・開発してきた。そしてついに、軍事衛星、レーザー光線、核ミサイル等を戦略とする宇宙戦争(スターウォーズ)時代に突入しつつあるのだ。

現時点では、「S D I」も未だ構想として、X線レーザーや宇宙原子力発電その他の技術は未開発で研究中である。しかし先日アメリカの潜水艦が、海中から宇宙ミサイルを発射するという実験の成功が報じられたように、アメリカで、そしてソ連でも様々な研究・開発が着々と進められているのだ。そ

して日本も外交的・科学的に、アメリカからS D Iへの参加を強く迫られている。従って日本も現在微妙な立場にあり、いずれはS D Iに巻き込まれてしまう可能性が充分にあるわけである。とは言っても毎日平穏で暮らしている我々にとっては、軍事構想とか宇宙戦争とか言ったところでS Fの世界の様に何だか現実感に欠けている。しかし例のソ連の原発事故やスペースシャトル爆発事故、ゲリラの海外テロ事件などの衝撃的事件を政治外交、防衛、科学などの様々な視点から眺めてみると、核戦争とそれらとはあながち無関係とはいえない気がしてくる。

収録項目 大項目【世界】中項目【アメリカ・戦争】小項目【戦争・軍事一般】

参考資料 再検討を迫られる米核戦略『中央公論』80・8/戦略防衛構想がめざすもの『科学朝日』85・10/S D Iは戦略構想をどう変える『中央公論』85・4/S D Iが開かせた米ソ首脳会談『文藝春秋』86・1/米ソ宇宙軍拡の実態『中央公論・臨増』83・7/スペース・ウォーの恐怖、米ソ宇宙軍備競争の現状と展望『週刊読売』82・9・12/レーガン提案で緊迫、スターウォーズの不気味な世界『平凡パンチ』85・2・18/田原総一郎のスーパー官僚論『S D I参加』に道を開いた日米軍事技術協力五年間の攻防『週刊文春』85・6・13/世界が日本を見做らう日『文藝春秋』81・11/他 (C・T)

創刊号切抜帖

BRUTUS

「より悦楽的に
生きたい男たちへ」
出版される雑誌が多く
なるにつれ、似通った雑誌が増え、個性もなくな
りつつあるようだ。そんな雑誌氾濫の海に、突如として姿を現した、新鮮な個性をもった楽園の島、それが「ブルータス」だ。

1980年5月創刊。「創刊する雑誌がアタルかどうかは、バクチといっしょで何の保証もないんです。信じているのは、自分の予感だけです。雑誌作りのポイントを強いてあげれば、まず作る側の自分が、本当に面白いと思うものをとりあげることだね。若者向けの雑誌だからといって、一番駄目なのは、作る側が若者に迎合することです。」(『潮』昭57・4)これが「ブルータス」をつくった創刊当時の編集長、木滑良久氏の考え方だ。木滑氏は、1960年代『平凡パンチ』編集長をやった、1975年にカタログ誌『メイド・インUSA』をつくり、1976年には「ポパイ」を生み出した凄い人だ。「ブルータス」は、より悦楽的に生きようとするすべての男たちに捧げられる。悦楽的に生きるということは、少年時の憧憬を実現する旅をすることにはかならない。

かつて、ひとりの「ブルータス」中毒者がいた。彼はいつかこんなことを言っていた。「俺自身の独断と偏見で言うと、『ブルータス』がブルータス

的であったのは、創刊から24号までのような気がする。新鮮でパワーがあった。『目を覚ませブルータス(創刊号)』『親爺たちの時代(2号)』『ブルータスパパに脱帽(4号)』『ブルータス本の特集(7号)』『ぜいたくは素敵だ(8号)』『男には隠れ家が必要である(9号)』『ブルータスの81年予言特集(12号)』『片岡義男と一緒に作ったブルータス(17号)』『活字中毒者を撃つな(22号)』『人生を悦楽する男たちはみんな不良少年だった(24号)』と、鳥肌がたつほどだった。読んでいて、思わずニヤリしたり、スゴイと唸ってしまったよ。」彼は毎月1日と15日を楽しみにしていた。しかし何故か最近彼は、「ブルータス」を見なくなっていた。「俺は『ブルータス』に、ブルータス人間、悦楽的フレッシュ・ジェネレーションを創造するため、『独断と偏見』を誌面に展開されることを願っているのだ。創刊時のあの新鮮さとパワーが懐かしい。」もしかすると彼は悦楽の島「木滑ブルータス」の再現を待ちつつげているのかも知れない。(T・H)